

第127回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2020年11月9日(月) 郵送句会

兼題「霜」「さざんか」

- 川井素山 ○渡し舟一夜の霜のしづく跡  
十三湖鋤簾重たき寒蜩  
夜半の湯に己が桶音雪の宿  
牡蠣剥く手止めぬ女の嫁自慢
- 保井寶正 ○霜晴れや和服にしやれて黒長靴  
鮫鱈や海のフォワグラどぶ汁に  
山茶花や帯の干したるわが書齋  
いつとなく老を忘する小春空
- 佐久間喬 ○峰の星比叡の寺に霜きびし  
鳥来たり山茶花の垣盛りなり  
屋敷門主なき家に山茶花散る  
眠る街無色透明氷張る
- 丸山酔宵子 ○風もなし音も聞こえぬ霜の声  
オリーブの葉を輝かすフルムーン  
紅葉こうようが遅いと阿弥陀振り向ひて  
声明や苔に滲み入る三千院
- 吉田啓悟 ○水澄みて心の奥の奥へ行く  
身に入むやたんすの隅のパスポート  
初霜や二人用ベンチにひとり  
小春日や洗濯紐の赤蜻蛉
- 青木英林 ○さざんかの垣根挟んで隠れん坊  
お十夜も世相映して僧一人  
大根干す眩しさ並ぶ軒の下  
凧に身をすく竦めたる木立かな
- 山本草風 ○早霜や季節二つに分けるかな  
冬隣炊事する手は常ならず  
夭折の菊香にむせぶ遺影かな  
禪の少年白し宮相撲

渡辺鯨波 ○山茶花や幼児らの乗るリヤカー行く  
さざんか散る薬学部へと抜ける道  
インバネス闊歩してゐる文士村  
ダイヤモンドダスト呪文解けました

後藤克彦 ○三密を避けて並ぶや菊人形  
山茶花や散る細道に招く猫  
山門や伸びに伸びたる烏瓜  
蜘蛛の糸絡む先にも紅葉あり

原 晶如 ○御浚ひの能楽堂に霜の朝  
ぬくぬくと肌着の色に枇杷の花  
墳丘のねむりは深し冬の蝶  
侘助のひらき加減を愛ほしみ

佐久間たか子 ○小春日に墓石みがきて春の如  
大霜の山肌極む八ヶ岳  
山茶花を掃く地<sup>じしめ</sup>湿りや日本晴れ  
霜晴に棚田<sup>まぼゆ</sup>目映くどこまでも

次回「萩句会」

日時 2020年12月14日（月）

郵送句会

兼題『羽子板市』または『闇鍋』一句

当季雑詠 三句